

# 市川のみち 地名の由来

《No.7》

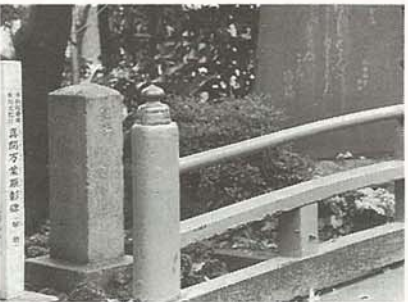


真間といえば手児奈、手児奈といえば「万葉集」……と、真間の地名は千数百年の昔から「万葉集」に「葛飾の真間」として伝えられてきた古代地名の一つです。

しかし、「ママ」の地名は、このほかにも、神奈川県に「壺下」（ママシタ）、埼玉県に「間々田」、栃木県に「間々田宿」、群馬県に「大間々」、愛知県に「真々」、「間々原新田」、三重県に「間々」、長野県に「真々部」などがあります。また、市内にも「欠真間」という地名があります。

## 真間

それでは、「ママ」とはいったい何を意味しているのでしょうか。一般には急傾斜の地域とか、崩れた崖地のようなどころを「ママ」と呼んでいるようで、前記の「ママ」もそのような地形の所が多いようです。さらに、東京都多摩郡には「崩崖上」と書いて「ママウエ」と読ませた小字名があったり、神奈川県愛甲郡では崖地の「



真間の三碑（継橋）

## アイヌ語「メエメエ」の訛り？

とを「ままつくすれ」といったりしています。

このように、土地の崩壊している状態を、アイヌ語では「メエメエ」と呼びました。ですから、この「メエメエ」が訛（なま）って、「ママ」になったのではないかと考えられます。そうすると、古い時代には、市川市域もアイヌ人との関係をもっていたかも知れません。

それにしても、なぜ市川市の「真間」の地名が、「万葉集」に伝えられてきたのでしょうか。当時、下総国を治める役所（下総国府）は、台地の上に置かれていました。そのため、都からの役人の出入りが多く、その中には山部赤人とか高橋虫麻呂といった歌人も多くいたことで、それらの人たちが作った歌が、「万葉集」編さんのときに取り入れられたからです。それらの歌の中には、「真間の入江、真間の井、真間の浦」といった当時の地形や生活の様子を推察できる歌とともに、昔から語り伝えられてきた「手児奈」の物語を聞いて作られた歌などがあります。

しかし、「万葉集」に歌われた由緒ある土地も、戦国時代には戦場となって荒れ果て、「万葉集」の古跡もそのままに放置されたため、忘れ去られようとしていました。それを、元禄九年（一六九六）、鈴木長頼が弘法寺の日貞上人と議（はか）り、万葉古跡の確認とその顕彰のために碑を建てたのです。継橋の袂（たもと）と手児奈霊堂の入口、そして亀井院前に建つ碑がそれで、「真間の三碑」と呼ばれています。

（社会教育指導員・綿貫喜郎）

◇ 次回は「奉免」を予定しています。